

台湾リスがキロスズメバチの巣を襲った！

清水順士・中村一恵

Junsi Shimizu and Kazue Nakamura:

Pallas's Squirrel Attacked the Nest of Japanese Hornet *Vespa simillima*!

はじめに

台湾リスはハイガシリス属 (*Callosciurus*) に分類されるリス科動物である。この属には16種が知られ (Wilson and Reeder, 1993), そのうちの1種が台湾リス (*C. erythraeus*) である。シッキム, ブータン, アッサム, ミャンマー, 中国南部, タイ, マレーシア半島, 海南島, 台湾などにかけて広く分布している。現在, わが国にはこのうち台湾原産の台湾リスが日本に持ち込まれ, 南関東以西の太平洋岸域を中心に野生化している。

台湾リスの食性は, 以下の本文中で述べるように基本的には植物質から成り, 昆虫などの動物質の占める割合は小さいと考えられるが, 今回, 鎌倉市において台湾リスがキロスズメバチの巣を2度にわたって攻撃または破壊する行動を観察したので報告する。

発見の経緯と観察記録

筆者 (清水) は2002年初夏から週2~3回の頻度で, 空家 (鎌倉市腰越1330-205, 図1) の二階霧よけ部に作られたキロスズメバチ (*Vespa simillima*) の生態観察を続けていたが, その際に台湾リスがキロスズメバチの巣を攻撃するのを2回目撃し, その場面を撮影できた。以下に観察記録を述べる。



図1. 台湾リスがスズメバチの巣を攻撃した行動が観察された環境。矢印はキロスズメバチの巣の位置を示す。清水順士撮影。

1) 2002年10月15日 (図2)

10月15日の朝, いつものようにキロスズメバチの巣を観察していると, 「クックッ」という声と共に霧よけ部の端部から台湾リスが現われ, キロスズメバチの巣付近にゆっくり近づき, 巣を通り過ぎて外壁を這って2階ベランダに至り, 数秒間止まっていた。その直後, もと来た経路を逆戻りして再び霧よけ上に至り, 約3mほど離れた位置から再び巣に近づき, 直前でいったん停止した直後, 巣の頂部をめがけて突進した。後足は霧よけを踏み, 前足で巣の壁を破り, 何かを口に運んでいるのが認められた。3~4秒ほどその動作を続けてから, 巣から身体を若干引き, 最初に姿を現わした霧よけの端部に走って移り, 姿を消した。

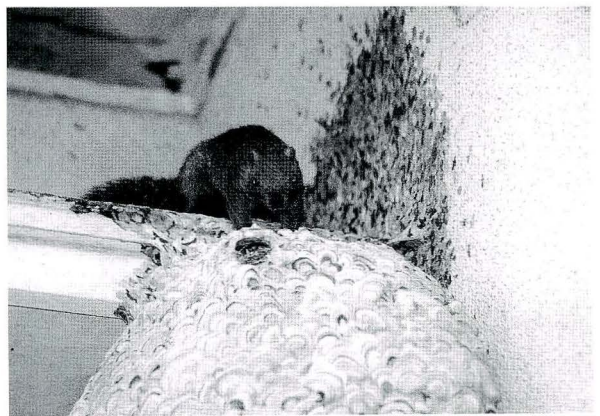


図2. キロスズメバチの巣を襲う台湾リス。2002年10月15日午前6:59。清水順士撮影。

2) 2002年10月20日 (図3)

空家の前で観察を始めたときには, すでに台湾リスは霧よけ上から前足と頭部を巣の頂部に突っ込んで何かを漁っていた。次の瞬間, 巣の頂部に飛び移り, 巣にまたがって前足と頭部を巣の頂部の穴に入れたり出したりして何かを食しているかのように口を動かしていた。その動作は極めて素早く感じられ, 最初から霧よけ端部へ姿を消すまでの時間は15~20秒であった。台湾リスが巣から立ち去った直後に, 1頭のキロスズメバチが巣から飛び出た。

なお, 図3の写真撮影時の30秒前には数頭のスズ

メバチが巣に出入りする姿があったが、タイワンリスが巣を襲っていた数秒間はスズメバチの姿はなかった。



図3. キイロスズメバチの巣を襲うタイワンリス。2002年10月20日午前6:45。清水順士撮影。

論議

鎌倉のタイワンリスはスダジイやタブノキなどの照葉樹林、落葉樹の二次林、スギ、ヒノキなどの針葉樹林など森林地帯を生活域としているが、森林に隣接した人家の庭にも出現する(中村, 1975; 田村, 1996)。そこでの食性は97%が植物質であり、残りの3%はアリ、セミ、キクイムシ、虫こぶ、カタツムリなどの動物質である(田村, 1990)。同じく移入先である伊豆大島産のタイワンリスにおいても、その食性は一年を通じて、花、葉、果実、種子などの植物質を主要な餌とし、とくにヤブツバキに対する依存度が高い(園田ほか, 2001)。移入先でのこうした食性は原産地とも一致している(Tamura et al., 1989)。

原産地の台湾南部では93%が植物質、残りの7%が動物質で、とくにシロアリが頻繁に利用されている。種子や果実を食べる割合は季節変動が少なく、1年を通して平均78%と高い値を示す。ところが、鎌倉のタイワンリスでは、7月から11月にかけては多くの植物が結実するため、この時期の食性は91%が種子や果実となるが、1月から翌年の6月にかけては、種子や果実が25%に減少し、大部分は花や葉、樹皮で占められる。とくにツバキが主要な餌となる(田村, 1990; 1996)。餌の供給量が劇的に減少するのは12月から5月にかけての時期であり、このため体重が落ちることが指摘されている(Tamura et al., 1989; Tamura and Terauchi, 1994)。

横浜市自然観察の森(横浜市栄区)における樹皮食害の調査結果によれば、この森のタイワンリスの樹皮喰いは11月から5月のみに見られ、とくに冬期に集中している。樹皮喰いは冬期の餌不足によって発生するのではないかと考えられている(篠原, 1999)。一方、伊豆大島のタイワンリスでは昆虫を食べるために

樹皮を剥ぐ可能性も示唆されている(園田ほか, 2001)。また、巣材としてスギの樹皮を剥ぎ取る行動が鎌倉のタイワンリスで観察されている(中村, 1975)。

おわりに

鎌倉のタイワンリスには捕食者が少なく、原産地と違ってとくにワシタカ類がほとんどいない。だが一方で、冬期の餌不足にさらされ、季節によって変動する餌に依存して生きなければならない(Tamura et al., 1989)。今回の観察ではタイワンリスがキイロスズメバチの巣を破壊したことは確かであろうが、スズメバチの巣中の何を食べたのかについては不明であるし、また、スズメバチの反応もわかっていない。しかしながら、原産地とは異なる環境下に定着していることから、タイワンリスが在来生態系のなかで新たな食生態を開発し、在来種に影響を与える可能性は今後もあるだろう。

謝辞

スズメバチ類の種の同定は神奈川県立生命の星・地球博物館の荻部治紀氏にいただいた。同博物館の高桑正敏博士は拙文をお読み下さり、適切な助言をいただいた。また、森林総合研究所多摩森林科学園の田村典子博士には文献の収集にご協力をいただいた。これらの方々に衷心より御礼申し上げる。

文献

- 中村一恵, 1975. タイワンリスに寄生するヒヨドリ. 野鳥, **40**: 648-653, 同訂正, **41**: 56.
- 篠原由紀子, 1999. タイワンリスに樹皮喰いされた樹木. BINOS, **6**: 21-26. 日本野鳥の会神奈川支部.
- 園田陽一郎・木崎卓平・倉本宣・田村典子, 2001. 伊豆大島におけるタイワンリス (*Callosciurus erythraeus taiwanensis*) の食性について. 明治大学農学部研究報告(129・130): 31-38.
- 田村典子, 1990. タイワンリスの原産地と帰化地における社会構造変異. 個体群生態学会会報, (46): 36-42.
- 田村典子, 1996. タイワンリス. 日本動物大百科第2巻II, pp.132-135. 平凡社, 東京.
- Tamura, N., F. Hayashi and K. Miyashita, 1989. Spacing and kinship in the Formosan squirrel living in different habitats. *Oecologia*, **79**: 344-352.
- Tamura, N. and M. Terauchi, 1994. Variation in body weight among three population of Formosan squirrel *Callosciurus erythraeus taiwanensis*. *J. Mamm. Soc. Japan*, **19**(2): 101-111.
- Wilson, D. E. and D. M. Reeder, 1993. Mammal species of the world, A taxonomic and geographic reference. Smithsonian Institution Press. Second Ed. 1206pp. Washington & London.

(清水: 鎌倉市腰越1330-2, 中村: 神奈川県立生命の星・地球博物館)